

令和元年6月25日現在

機関番号：37603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02845

研究課題名(和文)看護英語教育の基礎研究：有機的統合的教材開発

研究課題名(英文) A Fundamental Study of English for Nursing: Coordinated and Integrative Textbook Development

研究代表者

樋口 晶彦 (HIGUCHI, AKIHIKO)

宮崎国際大学・国際教養学部・特任教授

研究者番号：20189765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：過去3年間の本研究で分かったことは以下の諸点であった。[I.教科書分析](1)国内で出版されている医療・看護英語の内容は多様な内容であり、総合的な教科書が少ない。(2)従って四技能を含めた教科書が求められる。[II.担当教員の課題](1)この問題は国内のみならず、国際応用言語学会においても共通の課題であった。つまり、専門外のESP、EAPを担当しなければならない担当教員共通の問題が考えられた。この解決の為に(2)ICT導入の遠隔地教育の可能性が考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人英語学習者にとって、医療・看護英語の適切な教材開発は特定の四技能のどれかに特化したような教材開発ではなく総合的、かつ統合的な教材開発が求められること。特に今日諸外国からの入院患者の増加に鑑みると看護師の英語での伝達能力が益々求められている。

さらに、医療・看護英語に限らず、ESP/EAPの担当教員の多くが自分の専門外の科目を担当しなければならない場合が多い。これは、国際応用言語学会においても多くのESP教員のジレンマとして共有できた。従ってICT導入の遠隔地教育の実現へ向けて今後研究を進めていくことが求められる。

研究成果の概要(英文)：The study results obtained from this study for the past three years can be shown as follows: [I. Text analyses in English for Nursing] (1) Current textbooks in English for Nursing are varied: vocabulary oriented, dialogue oriented, and reading comprehension oriented. (2) Therefore, integrative textbooks in English for Nursing are needed. [II. Problems in ESP/EAP Teachers] (1) Many ESP/EAP teachers have to teach not their specialty in English but something different from their specialty. This problem is common to many ESP/EAP teachers in the world. (2) For this solution, ICT is one of the possibilities to introduce to ESP/EAP classes. In so doing, distance learning can be implemented in ESP/EAP classes. They are the main findings obtained from this study for the past three years.

研究分野：応用言語学、外国語教育政策

キーワード：医療・看護英語 統合的教材開発 ESP EAP ICT 遠隔地教育

1. 研究開始当初の背景

看護英語の教材開発に着手した当時は、国内での看護英語関連の教科書は約 40 数種類が出版されていたが、その内容は語彙に偏ったものもあれば、会話中心、読解中心といった教科書が多かった。換言すれば、四技能を含めた統合型の教科書はほとんど見られなかった。

そこで本研究では、実際の看護現場を想定して医学部保健学科や高等看護学校の看護学生たちに何が求められているのか、特に英語教育という観点から考えた場合に具体的に必要とされるものを考察することが必要であった。

2. 研究の目的

国内の看護学生、医学部保健学科の学生などの将来看護師として活躍を期待されている人々たちにとって必要とされる看護現場において求められる看護英語、患者と看護師・医者とのコミュニケーションに求められる英語、そうした英語に鑑みて求められる総合的かつ統合的な看護英語の教材を日本人英語学習者のために開発することを目的とした。

3. 研究の方法

まず、国立の高等看護学校、鹿児島大学医学部、久留米大学医学部などの協力の下に、そこで学ぶ学生、さらに教員の方々からアンケート調査を行った(Needs 分析)。さらに英国において出版されている看護関連の英語教材の内容を検討したり、エンジンバラ大学の夏期集中英語コース(医学英語)を受講することにおいて、我が国においてどのような内容を看護英語の教材に含めるべきかを検討した。さらに研究の方法として国内・国外の関連学会に出席することにおいて研究の方法を新たに探ることも行った。その結果わかった諸点も研究方法として新たに導入した。

4. 研究成果

過去 3 年間の研究において、初年度の研究実績としては、1 年間を通して積極的に国際学会へ出席し、さらに口頭発表を行ったことがあげられる。まず、(1)8 月 18 日からの電気通信大学における ESP の国際大会への出席において科学技術英語の読解の研究発表において得られた情報が Top-down, Bottom-up の両方のスキーマを活用するという点において有用であることが理解できた。

さらに科学技術英語の一般英語との語法の違いも再確認できたことも有用な成果であった。ICU の John Maher 教授と久しぶりに再会して先生の医学英語教育の歴史的変遷に関する御講演を拝聴したことも現在筆者が進行中の医学・看護英語研究において貴重な情報であった。

次に(2)9 月 17 日からの第 11 回 ICTEL 国際学会 (Imperial College of London)への参加において東南アジアの ESP 教育の進展も理解できた。その後の University of Bristol における医学部学生の夏期講習参加の可能性を探ることも出来た。次に(3)11 月の中旬から ETA-ROC 国際学会において看護英語の口頭発表をしたことも当該年度の研究実績として挙げる事が出来る。この ETA-ROC 国際学会は、JACET (大学英語教育学会)からの学会派遣という名誉ある事でもあり用意周到な研究発表の準備をして臨んだものであった。

国際学会への参加を通して、看護英語の指導に関して必要と考えられることを(1)語構成の指導、(2)症状(symptoms) (3)痛み(pains) (4) Doctor(Nurse)-Patient talks 医者(看護師) - 患者との対話)などは必要不可欠の指導内容であることが益々再確認できたと考えている。逆に薬学の基礎知識的な内容は、特に必要ではなかったのかもという印象をアンケート調査から理解できた。薬学の基礎知識として幾つかを導入してはみたが、必ずしもそれが効果があったのかどうかは明白ではない。基礎知識としてはあまりにも薬学の内容が希薄であったのではと 考えている。さらに、看護英語で平素頻繁使用されている看護師の携行品、部局名、などの英語は導入必須内容として理解できた。今後は看護英語、医学英語において使用される略語の扱いをどのようにするのかの検討が必要であると思う。

二年目の平成 29 年度は、三回の国際学会への出席(口頭発表を含む) 四編の学術論文の発表が主たる研究実績であった。特に、最初の国際学会出席はイギリスの BALEAP という二年に一度開催される学術目的の英語教授 (TEAP)の国際学会であった。三日間にわたってイギリスの University of Bristol において開催された。英国内の研究者たちがほとんどであったが、EAP の研究の多様性、進展が理解できてかなり進んできたこともわかった。二つ目の学会は国際応用言語学会(AILA)でブラジルのリオ・デジャネイロで開催された。UAE, テルアビブ、そして日本と合計五名の大学の研究者たちと合同で TEAP (学術英語教授)に関するシンポジウムを開催した。当方は研究課題である看護英語教授に関する実践発表を特に日本で出版されている看護英語の複数の教科書を分析した結果を中心として

発表した。会場への参加者も三十名を超えていて TEAP への関心が高いこともわかった。三つ目の学会はバンコクで開催された国際学会へ出席してアジアの研究者たちと TEAP 他に関する内容について意見交換をして情報を収集した。TEAP の研究はまだ少なくこれらが東南アジアでも出てくる課題と感じられた。看護英語 First Aid!の改訂版は、少しずつ取り組んではいれるものの、新年度である平成三十年年度の完成を目指している。

2018 年度は主に以下の諸点を中心として研究活動に励んだ。まず、学会参加として(1) JACET 全国国際大会(青山学院大学)、(2) Innovation in Language Learning International Conference (Florence Italy)、(3) JAAL in JACET 研究大会(高千穂大学)、(4) CEFR に関する国際研修大会(京都大学)と 4 つの学会に参加することで以下の諸点を研究できた。(1) JACET 全国大会においては、全国の ESP 研究者たちとの情報の交換、共有が大変為になった。特に専門外の(英語学とか外国語とは離れた)ESP 領域においてどのような指導と評価が求められるのかという ESP 教員共通の課題がやはり存在することが明白になったこと。この問題を解決するためにどのようなことが可能なのか、今後検討することが必要である事が分かった。(2)に関しては 3 日間の Florence での国際学会であった。直接 ESP に関する研究発表はなかったが、欧州における外国語教育の実態が、最新の情報を含んだ貴重な資料として入手できたことは大変意義であった。特に CLIL や学生が学ぶ外国語やその領域、教員の質、など近年増加してきた移民も含めて作成された資料が大変今後の研究に役立つと思う。(2)に関しては、これまでの ESP に関する自らの研究発表をポスターセッションにおいて九州・沖縄支部の一員として口頭発表を行った。更に英国の BALEAP 学会から最近出された資料のことも大変参考になった。現在この資料の読解に入っている。(4)最後に本年の 3 月上旬に京都大学において開催された CEFR に関する国際研究集会では CEFR 増補版に関する発表があり、外国語教育政策に大した議論もなく導入されてきたことや他の外国語教育教育からの提案も充実していた。

5. 主な発表論文等

- ・ Akihiko Higuchi. Task-Based Instruction in English for Nursing: Advantages and Disadvantages. *Epoch Making in English Language Teaching and Learning: Evolution, innovation, and Revolution Program Book & Selected Papers from 2016 PAC* pp 57-58
- ・ Akihiko Higuchi, Misaki Arima. A Study of the Ambiguous Aspects of Language Testing *VERBA No. 40* 2017 18-27
- ・ Akihiko Higuchi. Teaching English to Japanese College Students of Nursing: Essentials in the Course Contents from EN Textbook Analyses *ESP の研究と実践* 2018 pp 1-7
- ・ 樋口晶彦・原 隆幸 科学技術英文読解の一考察：言語的諸特徴と ESP の理論的進展から *VERBA* 2018 pp1-15
- ・ 樋口晶彦・日高佑郁 小学校英語教員養成への一考察 - オーストラリア TECSOL コースからの示唆 - *鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編* 2018 pp 113-123
- ・ 橋口 知：青少年スポーツにおける諸問題. *スポーツ精神医学改訂第 2 版*. 日本スポーツ精神医学会編集, pp61-65, 診断と治療社, 2018.12
- ・ 橋口 知：養護教諭養成における医療的ケアの教育に関する一考察. *鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要*. 第 27 巻, pp295-299, 2018.03
- ・ 橋口 知：精神科医師のスポーツドクター活動. *鹿児島県医師会報*. 第 801 号, pp8-10, 2018.03
- ・ 橋口 知：第 1 章 Q4 認知症の判断と家族への説明は. 認知症者の転倒予防とリスクマネジメント第 3 版. 日本転倒予防学会監修, pp25-29, 日本医事新報社, 2017.

〔雑誌論文〕(計 15 件)

〔学会発表〕(計 7 件)

- ・ Akihiko Higuchi. Task-Based Instruction in English for Nursing: Advantages and Disadvantages *ETA-ROC 2016* (招待講演：台北英語教育国際学会)

- ・ Akihiko Higuchi. Teaching English to Japanese College Students of Nursing: The essentials
AILA World Congress Rio 2017 Abstract Booklet (国際応用言語学会)
- ・ John Tremarco. Introducing medical students to active learning in a local hospital
IATEFL 53rd International Conference and Exhibition 2019 (国際学会)
- ・ 樋口晶彦 学習者中心アプローチについての総合的検討 2019 JAAL in JACET 高千穂大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：ジョン・トレマルコ
ローマ字氏名：John Tremarco
所属研究機関名：鹿児島大学教育センター
部局名：鹿児島大学教育センター
職名：准教授
研究者番号(8桁)：60389096

研究分担者氏名：橋口 知
ローマ字氏名：Hashiguchi Tomo
所属研究機関名：鹿児島大学法文教育学域教育学系
部局名：鹿児島大学法文教育学域教育学系
職名：教授
研究者番号(8桁)：90315440

(2)研究協力者

研究協力者氏名：鶴丸修士
ローマ字氏名：Tsurumaru Naoshi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。